

チェコ児童文学への招待

平成 20 年 1 月 27 日

講師：村上 健太

はじめに

皆さんこんにちは。村上と申します。今回の展示会において監修という大役を仰せつかりまして、このように素晴らしい展示会ができて、私も非常にうれしく思っております。

今回のような展示会にかかわりを持たせてもらった経緯を申しますと、チェコの児童文学というテーマで論文を書きまして、しばらくしてから、国際子ども図書館でチェコの本の購入を検討されたことがありました。そのとき、チェコ語が全くわからないということと呼ばれまして、お手伝いをしたのが初めてでした。それから、先ほど齋藤館長からお話がありましたが、図書館が千野栄一先生の蔵書を購入され、ぜひ、展示会をしたいということで私の方にお話をいただき、監修をさせていただいたわけです。

この展示会のオープニングに際しまして、チェコの子どもの本について、特に歴史とテキストに焦点をあててお話をさせていただきたいと思っております。

チェコの子どもの本といいますと、イラストに興味をもたれる方がたくさんいらっしゃいます。と申しますのも、イラストは目に見えてわかりますし、世界的に有名なトゥルンカであるとか、パツォウスカーであるとか、著名な画家がたくさんいます。そこから入っていく方がたくさんいまして、専門家の方もたくさんいらっしゃいます。残念ながら私は絵のほうは人並にしかわかりませんので、その話はあまりできないかと思いますが、テキストの方では私はチェコ語をやっています、今でも日々チェコ語を使っておりますので、逆に、普段は耳にするようなことのない話ができるのではないかと考えております。

チェコはどんな国

チェコという国は、基礎的なことは申し上げませんが、中央ヨーロッパにある小さな国です。どのように小さいかといいますと、面積は北海道ぐらいしかありません。人口は東京より少なく、1千万少しの人が住んでいます。それぐらいの小さな国ではあるのですが、非常に水準の高い文化をもつ国です。「どうしてチェコのような小さな国に興味をもつようになったのですか」という質問をよく受けるのですが、チェコの高い文化に魅せられたということがあります。非常にとっつきにくい言語ではあるのですが、その言葉を乗り越えていくと非常にすばらしいものがたくさん待っている、という国です。

たとえば、言葉の垣根のないものという、先ほど申し上げたような絵画であるとか、アニメーションであるとか、特に日本でもブームになっておりまして、今、チェコセンタ

一で展覧会も開かれております。「クルテク」(もぐらくん)のアニメーションは言葉がありませんので、誰が見てもよくわかります。

音楽には、先ほど演奏していただいたドヴォルジャーク、あるいはよく知られているスメタナの「モルダウ」という交響詩がありますが、「モルダウ」という名前をいいますと、チェコ語ではないじゃないかのご指摘を受けます。慣例的にドイツ語の川の名前が交響詩の題名になっているのですが、チェコ語では「ヴルタヴァ」といいます。曲の名前はずっと「モルダウ」できています。最近ですが、街角でアマチュアオーケストラのポスターを見ました。この「モルダウ」という曲はアマチュアオーケストラの人気のレパートリーになっているのですが、私がうれしかったのは、その名前が「モルダウ」ではなくて「ヴルタヴァ」になっていたのです。「ヴルタヴァ」だけではなくて、「ヴルタヴァ川」と書いてありまして、「ヴルタヴァ」だけでは何のことかわからないので、おそらくオーケストラの方が「ヴルタヴァ川」と書かれたのじゃないかなと思います。チェコ語がだんだん浸透しているなと思いました。そのうちに「ヴルタヴァ」といって「モルダウ」のことだとわかってくれる日が来るんじゃないかなと思います。そのような「モルダウ」とか、「遠き山に日は落ちて」(注：交響曲第9番「新世界」第二楽章が唱歌になったもの)のドヴォルジャークであるとか、あとは少し詳しい人であればヤナーチェク—優れた作曲家の名前ですが—をご存知の方もいらっしゃると思います。

このように音楽はよく知られております。それも言葉の垣根なしで理解できるからだろうと思います。アニメーションについても、同じことが言えるのではないかと思うのですが、逆に言葉の垣根があるために、優れているにもかかわらず、チェコ以外の国では知られていない芸術の分野があります。そのうちの 하나가映画です。チェコの映画は非常にレベルが高いです。最近、横浜でチェコ映画祭が開かれまして、だんだん知られるようになってきましたが、私はチェコの映画は世界的な水準で優れたものがたくさんあると思います。どんどん知られていってしかるべきと思っています。チェコセンターでも催されるのでしょうか、チェコの映画の紹介がされていくべきだと思います。代表的な名前をあげますと、メルツェル、スヴェラーク。スヴェラークは10年ぐらい前に「コーリャ愛のプラハ」という映画の監督をした人です。あと、日本ではあまり知られていないヴォイチェフ・ヤスニーという人がいます。私はそれほどチェコの映画を見たわけではないのですが、これまで見た映画でどれが一番好きですかといわれると、このヤスニーという人の映画を挙げたいです。邦題はまだないのですが、英語でいうと、”all my good country men“、日本語でいうと「我がいとしき同胞たち」とでもいうのでしょうか。戦後のチェコのある田舎の村での人々のいろいろな運命が描かれていて、それが非常に優れた映像美で表現されていて、これまで見た中では屈指の映画だったというふうに思っています。邦題がないと申しましたが、日本においてまだ、紹介されてないのではないかと思います。

そのように言葉の垣根があるために知られていないものの一つに、言葉を主体とする文学もあります。そして、児童文学もその中に入っていることになります。もっとも児童文

学は、それでも少しは内容が知られているのではないかと思います。その理由というのは、水準の高いアニメーションの題材となるものがあったからです。イジー・トゥルンカの人形アニメーションであるとか、先ほどいいましたミレルの「クルテク」(もぐらくん)のようなもので、チェコの存在が知られています。たとえば、もぐらくんでいうと『もぐらとじどうしゃ』(No.248 [展示資料番号。以下同じ。] うちだりさこやく 福音館書店 1969)などの絵本がたくさん出ています。そういったものが紹介されるという経緯によってチェコの本が知られているということはあると思います。ここからチェコに興味をもってチェコに留学するという人もたくさん出ていまして、私は日々、実務上のお手伝いを大使館でしております。

これは私見ではあるのですが、チェコの優れた文化が外国で知られていない原因の一つに、チェコ人の方々の出し惜しみがあるのではないかと感じております。これは一種のプライドであり、もしかすると少し劣等感のようなものがあるかもしれませんが。自分たちの文化、チェコの文化の水準が非常に高いということと、理解が容易ではないということで、他の国の人にはなかなかわからないだろうな、という思い込みを持っていらっしゃる人にこれまでよく会いました。といたしますのは、一つ例をあげますと、これも映画ですが、日本で紹介されている題が「スイート・スイート・ビレッジ」という映画があります。今から30年ぐらい前、共産主義時代のころの、男たちの友情と村の人々の生活を描いたもので、チェコのユーモアがでてきます。ユーモアが主体となった映画ではあるのですが、脚本を書いた人が「コーリャ愛のプラハ」を書き、しかも主演をしましたズデニェク・スヴェラークという非常に有名な人なのです。この映画を話題にした時にチェコ人と話をしました。「でも君たち(日本人)はわかりにくいだろう」と必ず言ってきます。その中に描かれたユーモアは、チェコ人の間で何年か暮らした人で、チェコの社会もわかっているような人でないと、なかなかわかりづらい、ということは確かにあると思います。しかし、皆でいわなくてもいいじゃないかと私などは思ってしまいます。

保川亜矢子さんが部分訳を出していらっしゃる『子どものエチュード』という可愛らしい本がありまして、それについてチェコ人女性と直接話をしたとき、「この本もほんとにいい本よ。でもあなたたちにこれがわかるかしら」と言われました。チェコの人がよく発する言葉です。これは自国の文化に対する誇りもあるし、なかなか言葉がわからないとか、背景がわからないから外国には通じないのではないかと、という複雑な感情がある。そこから、なかなか知られていないということにつながっていくのではないかと私は考えています。

逆に、日本でチェコについて研究している、あるいはチェコ関係の仕事をしている人も増えてきました。その人たちはチェコ語も理解できる人たちなのですが、その人たちにも一種の優越感のようなものがあるのではないかと思います。一般のチェコ語のわからない人には見えないけれども、理解できる私たちだけに見えるすばらしい世界がある、というような特別な優越感のようなものがあると思います。このような人、チェコ語ができる人

は日本では増えてきています。年々、チェコに留学される方、語学留学される方が増えております。チェコの本もだんだん紹介されるようになってきました。

千野栄一先生

私たちの世代に共通する点は、「チェコ語はどこで学んだんだ」というとき、千野栄一先生に手ほどきを受けたという人が多いことです。そして直接、千野先生に教えを受けていなくても、千野先生に習ったという人に習ったという、いわば孫弟子のような方がたくさんいらっしゃいます。千野先生が書かれた『チェコ語の入門』（白水社 1975）、そのほかにも教科書がありますが、その教科書が比較的早期に刊行されていたおかげで、非常にしっかりした教科書ですから、研究者たちが、無駄なくチェコ語の基礎を固めることができた。変な教科書であつたら、時間の無駄にもなりますし、妙な知識がついていたりしますし、我々は幸運であつたといえます。

そして、千野先生は集書家、本を集めるコレクターとしても非常に知られておりました。『プラハの古本屋』（大修館書店 1987）などのエッセイを読みますと、どれだけ本に愛着を持っておられたかがよくわかります。今回の展示会は、千野コレクションと我々は呼んでいますが、これなしでは全く考えられなかったことです。私は今回の展示会の仕事をお手伝いさせていただきまして、子どもの本の蔵書がこれだけあるというのには驚きました。先生の専門は言語学で、文学にも大変造詣が深くていらっしゃるのですが、こちらに展示されているものは、千野先生の子どもの本の蔵書の一部にすぎないといえるのです。その点は本当に驚いたことです。

同時に、千野先生は児童文学の翻訳も多く手がけられました。ここの展示会場にも多くの児童書が展示されています。その代表的なものは、カレル・チャペック(No.51『ソリマンのおひめさま』集英社 1980)とか、フルビーン(No.108『花むすめのうた』ほるぷ出版 1984、No.110『ひよことむぎばたけ』偕成社 1978)とか、画家のほうですが、パレチェック(No.51、No.176『ちびでぶカバくん』フレーベル館 1981)などです。

チェコの子どもの本の起こり

この展示会をご覧いただければ、チェコの児童文学は昔から案外翻訳されていたのだなということがおわかりいただけると思います。その最初は戦前の中野好夫さんによるカレル・チャペックの『長い長いお医者さんの話』(No.52。注：『王女様と小猫の話』のタイトルで、第一書房から1941年に出版。その後、『長い長いお医者さんの話』のタイトルで、岩波書店から1952年に出版)に始まるかと思えます。この翻訳は英語からの重訳です。この本によってチェコの児童文学の扉を開けた人がたくさんいらっしゃると思いますし、非常にオリジナルの雰囲気をよく伝えているのではないかと思っていますので、そういう意味では日本に早く紹介されてよかったと思います。しかも最近、チェコ語からの直接の訳も出されておりますので、読み比べてごらんになるのも面白いことじゃないかと思えます。千野先生と同じようにチ

エコ語からの直接翻訳の第一世代は、千野先生と、先年お亡くなりになられた井出弘子さん、それから栗栖継さんたちがいらっしやいます。それから多くの方が子どもの本を訳しておられますし、私と同時期にチェコに留学していた比較的若い世代の方々も、多かれ少なかれ、子どもの本に興味を持っておられます。これからは、機会さえあれば、どんどん紹介されるようになっていくと思います。

チェコに関連する一番の人物と言ったときに、みなさんは日本に知られている一番の人物は誰だと思えますか。いろいろ異論はあると思いますが、私は、カレル・チャペックとイジー・トゥルンカとって間違いはないかと思えます。

カレル・チャペックの中野好夫さん訳による『長い長いお医者さんの話』の元々のタイトルは「九つのお伽噺」というのですが、カレル・チャペックのお兄さんのヨゼフ・チャペックの挿絵で出た本です。この本が、チェコの児童文学では一番知られていると思います。このカレル・チャペックが活躍したのは20世紀前半の第一共和国時代です。第一共和国時代は1918年から1938年まで続きます。一方、トゥルンカの方はこの頃は修行中といえると思います。才能が開いたのは第二次世界大戦が終わったあとでした。社会主義時代と重なってきます。第一共和国以前、つまりチェコスロヴァキアができる前は、チェコという国ではなく、オーストリア・ハンガリー二重帝国の一部でした。1918年の独立前、それから先ほどいいました1918年から1938年、それからそれ以降、第二次世界大戦後から3年ぐらいして社会主義体制にチェコは組み込まれるわけですが、その時代以降、と大きく三つの時代に分けて、お話ししていきたいと思えます。展示会の展示もそのように分かれておりますし、チェコ本国で行われる区分けもそのようになっております。

チェコの子ども本はいつ頃から始まったかと歴史を振り返ってみますと、始まりは18世紀の末です。つまり1780年から1790年の頃にさかのぼることができます。日本でいうと江戸時代ということになります。この頃チェコは、オーストリア帝国ハプスブルグ家の支配下にありました。18世紀の末にヨーゼフ二世という皇帝がおりまして、その前にマリア・テレジアという有名な女帝がいるわけですが、このヨーゼフ二世の時代に新しい学校令が出されました。そして、教科書を中心に、子どものための本が作られるようになりました。最初の頃はドイツ語からの翻訳が中心でした。内容としては、ヨーロッパのどの国もそうなのですが、児童文学の先進国のイギリスさえもそうであったと思うのですけれども、教訓主義、教条主義、つまり目上の人のことはきちんと聞かなければならない、親のいうことは聞かなければいけない、そして学校の先生の言うことも聞かなければいけない、宗教的な意味合いになると、神様の教えも聞きなさい、と教え込むためのテキストという意味合いが強かったのです。そのような理由で、今日まで読まれているものはありません。今では国立図書館とか児童文学の専門図書館でこの時代の本を見ることができます。

それと同時に、その時代に世界の名作といわれるものがチェコ語にどんどん訳されていて、子どもの本のレパートリーに加えられていきました。このような状況が19世紀の初めから19世紀を通じて続きました。この当時翻訳された主なものをあげますと、デフォー

の『ロビンソン・クルーソー』とか『イソップ物語』ですね。『アラビアンナイト』、『ガリバー旅行記』、デュマの『三銃士』、『モンテ・クリスト伯』、アメリカからは『アンクル・トムの小屋』が代表的なものとしてチェコ語に訳されていました。チェコは翻訳も盛んな国でして、世界のあらゆる本がその都度チェコ語に訳されております。翻訳大国でして、日本もそうですが、あらゆる言葉の専門家がいらっしゃると言っているのではないかと思います。日本からの翻訳もよくなされています。チェコセンター所長のペトル・ホリーさんも日本の名作文学を非常によく訳されていらっしゃるお一人です。

チェコの昔話と伝説

このような状況が 19 世紀を通じて続いていくわけですが、19 世紀の半ばになりますと、今度は昔話や伝説などの口承文芸に関心が集まってきます。これはチェコだけではなくありません。皆さんご存知のように、ドイツにおいては、これより時期は早いですが、グリム兄弟がグリム童話集として口伝の伝承を集めましたし、これはすべてのヨーロッパ民族の国において行われた過程です。北欧でもそうでした。イギリスでもそうでした。ロシアでもアフナーシェフという人がロシアの民話を集めました。そのようなことがチェコでも行われました。

チェコにおいて、どういう作家が昔話、伝説を収集したかといいますと、エルベンとニェムツォヴァーの二人の名前をあげることができます。(スクリーンを指して)こちらに出してもらったのはエルベンとニェムツォヴァーの昔話集です。その中の一場面ですが、何の話かすぐおわかりになると思います。チェコ語でいうと「しょうがパンのおうち」という名前になるのですが、お菓子の家ですね。『ヘンゼルとグレーテル』のチェコ語版といえる話です。この話ではホンズィークとマルーシュカというのがヘンゼルとグレーテルという兄妹になっております。

エルベンとニェムツォヴァーはそれぞれの昔話集に特徴がありまして、エルベンの方はどちらかというとグリムに近い。どういう意味かといいますと、原文をあまり変えていない。グリムの方にもいろいろ議論がありまして、後期になってだんだん手が加えられていったという大きなテーマになりますけれども、それほど変えられてはおりませんよね。エルベンの昔話集もそういった特色がありまして、非常に簡潔な口伝の魅力を十分に生かした昔話集であるということができると思います。ただ、話の数は多くなく、グリムは 200 を超える話を集めておりますが、エルベンは刊行されたものでは 20 ちょっとくらいです。ただし、エルベンはチェコの話だけではなくて他のスラヴ民族の話も集めておりますので、全体の数はそれほど少ないわけではありません。チェコのはそれほど多いというわけではないということです。それに対してニェムツォヴァーは、職業柄とでもいうのでしょうか。女性小説家でありました。一番有名な作品は『おばあさん』(No.20 栗栖継訳 岩波書店 1971)という、すべてのチェコ人が読むような作品で、展示の中にも含まれております。小説家だったので、いろいろ手を加えることが好きだったのでしょうか。かなり脚

色が加えられておりまして、作家の筆になる、読ませる昔話、伝説という意味合いが強くなっております。これらの訳としては『チェコスロバキアの民話』(No.16 大竹国弘訳編 恒文社 1980)という本が刊行されておりまして、エルベンとニェムツォヴァーの昔話を読むことができます。

申し遅れましたが、どんなチェコの本が日本では訳されているかという情報も、その都度お話ししたいと思います。と申しますのは、悲しいことにチェコの本は出るのは出るのですが、すぐに絶版になってしまうのです。そういう意味でなかなか店頭で見ることができません。そういう本を見るには、大きな子ども図書館に来なくても市町村立図書館で、取り寄せて見ることができる資料もあります。興味を持っていただいた方に情報をお渡しするというので、どのような翻訳書があるか、その都度お話ししていきたいと思っております。

エルベンとニェムツォヴァーがチェコでグリムのような役割を果たした人だと申しました。それは昔話が主なのですが、伝説はどうかというと、面白い伝説がたくさんあります。『わたしのリューベツァール』(No.239 邦訳なし)という本があります。著者の名前はオトフリート・プロイスラーです。チェコ人ではありません。有名なドイツ児童文学の『大どろぼうホツェンプロッツ』(中村浩三訳 偕成社 1966)を書いたプロイスラーです。プロイスラーはチェコで生まれた人で、移住してドイツの方へ行きました。チェコと国境を接するドイツ地方に興味があったのでしょう。

クラコノシュという巨人伝説の主人公です。ドイツ側からいうとエルツ山脈、チェコ側からいうとクルコノシュという山脈があるのですが、そこに棲むと伝えられている巨人の話です。これはチェコの占有物ではありませんで、ドイツ側からも巨人の伝説はたくさん伝わっております。ドイツ語名はリューベツァールといいますね。これは「カブを数える」という言葉からきているのですが、なぜカブを数えるのかというと、あるところの姫君を連れてきて、自分の妻になってくれと言うと、その姫君が機転をきかせて、ここに植えてあるカブを全部数えあげたら奥さんになってあげましょう、と答えます。そのカブが非常に多いのです。純心なリューベツァールが数えている間に、姫君はまんまと逃げてしまいます。そういう話から付けられた名前のようなのです。実はリューベツァールというのはこの巨人にとってはありがたくないという呼び名である、とチェコ語のテキストに書かれていまして、チェコ語のほうではクラコノシュという名前になっています。

クラコノシュに限らず、展示会のケースの中にあります、ヴォドニーク(Vodník)という、日本でいうとカッパにあたる一種のばけものがあります。あるいは、夜中に熱にうなされるようなことがありますよね。そういったときに考えつかれた夢魔という存在、これは栗原成郎先生の『スラヴ吸血鬼伝説考』(河出書房新社 1980)に非常に詳しく書かれてありますが、夢魔という存在もチェコでは信じられています。非常に多彩で、伝説もぜひとも私などは紹介したい一つではあります。昔話や伝説はエルベンとニェムツォヴァーだけではなく、この展示の中にもありますけれども、いろいろな人が昔話集や伝説集を出版しております。それもお覧いただければと思います。

『ほたるっこ』

ここまでチェコ人作家の書いた創作作品が全く出てこなかったのですが、作品としてはいろいろあったのです。ただ、先ほども申し上げましたように、教訓的な本ばかりで、後世にまで伝わっている作品はほとんどありません。しかし、19世紀後半、一つ大きな本が出てきました。それはカラフィアートの『ほたるっこ』です。皆さんにお見せしているのは、トゥルンカ版(No.28)です。これが一番よく知られていますね。そのほかの画家が挿絵を描いた版もたくさんあります。ぜひとも見比べていただきたいと思います。プライシグとかマテスなど、いろいろな画家がほたるの絵を描いていますので、見比べてみてください。そのようにいろんな画家が挿絵を描くほどよく知られた作品なのです。内容はかなり教訓的な話ではあります。どういう内容かといいますと、作者のカラフィアートは、プロテスタントの牧師さんでした。牧師だったこともあって、神に対する従順とか、親に対しても従順であるように、というメッセージが含まれています。チョコンと腰掛けてカンテラのようなものを持っているのがほたるっこですね。この男の子が生まれて大きくなっていく過程で、両親のいうことを聞かなかったり神の教えに背くようなことをしたりすると、その都度、必ずとっていいくらいひどい目にあいます。そういう試練を乗り越えていきながら、だんだん大人になって、ほたるとしての自分のために気がついていく。そして成長していくわけですね。失恋もありますけれども、最終的には幼なじみの女の子、これもほたるですが、一緒になって幸せな家庭を築くという話です。ついでに申しますと、この話の最後は悲しいものでして、ほたるたちは冬ごもりをして冬眠をするのですが、ある年、厳しい冬が来て、春になってみると、ほたるの墓標である花が咲いていました、というところで終わってしまいます。それも神様がお定めになったことであるから仕方がないというメッセージで締めくくられているのです。これをもとにしてアニメーションも作られておまして、これは子どももたくさん見るので、結末は変えられております。最後の一家が死んでしまうところが省かれています。原作はそうなっているということです。この作品は翻訳もあります。進藤嘉子さんが訳されたものがドン・ボスコ社から出ています(No.36 1996年刊)ので、日本語で読むことができる本です。

歴史物語と詩

19世紀後半のチェコは、どういう雰囲気であったかといいますと、独立に向けて国全体が進んでいったということが言えると思います。オーストリア帝国の下にいたのですが、ハンガリーという国は、オーストリア・ハンガリーと二頭体制になっていましたから、チェコ人たちも主権を確立しようとしていて、チェコ語、チェコ文化を、顕彰しようとする動きがありました。そういう流れにそって出てきたのが歴史物語です。一番代表的な書き手が、イラーセクという人でして、イラーセクは、大人向けですが、歴史小説を書いた人です。チェコ人は過去にいろいろと苦難の歴史があったのですが、そういった歴史的事件、

百姓一揆であるとか革命とか宗教戦争とか、そういった時にチェコ人がいかに苦難を切り抜けていったかを描写した長編小説をたくさん書いております。イラーセクが書いた本の中に『チェコの古代伝説』(No.37) というものがあります。残念ながら邦訳はありません。幸い、トゥルンカがアニメーションにしております。同じく「チェコの古代伝説」というタイトルで出しております、昨年 DVD でも出たと訊いておりますのでこれも手軽に見ることができますし、チェコの伝説時代も含めた昔の歴史をイラーセクがどのように描写したかを垣間見ることができます。

それと同時に、詩がチェコ文学の中に大きな地位を占めております。ちょっと話が飛びますが、チェコではノーベル文学賞受賞者が一人います。それはヤロスラフ・サイフェルトという詩人です。サイフェルトは 20 世紀の詩人で、国民的詩人と言えそうですが、その人が文学賞を受賞したということは、チェコにおいて、詩というものが、いかに崇められているか、高い地位を占めているかが、端的に表れているのではないかと思います。

子どものための詩もたくさんあります。その代表的なものが書き始められたのが 19 世紀後半なのです。名前を挙げますと、スラーデク、ライス、コジーシェクという人たちがおりまして、その人たちはすべて、展示の中に入っています。

スラーデクは、自然と季節の移り変わりの美しさとか、親子間の愛情であるとか、無邪気な子どもの姿を描いております。このような子どものための詩には定番のテーマもあれば、この時代の雰囲気や反映した愛国的な内容の詩もあります。愛国的な内容が音楽の分野で表されたのが、スメタナの「我が祖国」です。音楽ではああいう形で現れたのです。文学においては『チェコの古代伝説』であるとか、このスラーデク、その他の詩人の愛国的な詩の中に現われたということです。

第一共和国時代の創作童話

1918 年に、チェコスロヴァキアは独立にたどり着きました。先ほど申し上げましたような、チェコ人の主権を回復する運動が実を結び、とうとう第一次世界大戦でオーストリア・ハンガリー帝国という国はなくなり、他のいろいろな国とともにチェコスロヴァキアという国の独立が達成されました。初めに言いましたカレル・チャペックが活躍し始めるのがこの時代です。この頃からジャンル分けしないと話がわからなくなってしまうので、創作童話という言葉を使いやすく使います。ドイツ語でいうとクンストメルヒェン、創作のお伽噺というものです。そういう意味で架空の話です。そういったジャンルを創作童話とここではいいますが、それを書いたのが、先ほどいいましたカレル・チャペックです。カレル・チャペックだけでなく、兄さんのヨゼフ・チャペックも書いています。それから名前だけを挙げますが、エドアルド・バス、カレル・ポラーチェク、ヨゼフ・ラダ、オンドジェイ・セコラといった人たちがいます。これらの作家は、すべて展示の中に入っています。このうちカレル・チャペックは、先ほどの『長い長いお医者さんの話』で有名ではあるのですが、実はカレル・チャペックが書いた子どものための作品は、数としては多

くはないのです。『長い長いお医者さんの話』と『ダーシェンカ:あるいは小犬の生活』(No.55 保川亜矢子訳 SEG 出版 1996)という話があるくらいです。カレル・チャペックは他のジャンルでもいろんな本を書いています、すべての分野において傑作を残しているのはすごいと思うのですが、子どものための作品の数は多くありません。この時代の特徴として、子どもの本を書いた人は、同時に大人のための本の書き手でもあります。一般文学でも名を成した人たちが子どものために本を書いた。それが傑作として残っているということが一つの特徴としてあると思います。その代表がカレル・チャペックであり、ポラーチェクという人もそうです。ポラーチェクの作品には、小野田澄子さんの訳で出ている『魔女のむすこたち』(No.260 岩波書店 1969)、『ぼくらはわんぱく 5人組』(No.93 岩波書店 1990)があります。ポラーチェクも大人のための風刺的な読み物を書いておりますが、子どものために書いたのがこの二つです。

それからヨゼフ・ラダです。国民的な画家といえると思います。(スクリーンを指して)これは、二人の娘さんにせがまれて、どんどん話を作っていったら出来上がったという『黒ねこミケシュのぼうけん』(No.63 小野田澄子訳 岩波書店 1967)という本です。ラダとセコラは、挿絵画家から出発して、それから派生して物語を書くようになって、子どもの本を残す結果になった、というところが共通しています。ただ、セコラのほうは今まで日本語訳がありません。伝え聞くとところによりますと、著作権上の問題があるようです。セコラはドイツ語圏では非常に有名です。「ありのフェルダ」というキャラクターがありまして、このキャラクターを主人公にした本が残されています。これがドイツ語圏で有名になっておりまして、それが起因となって著作権が非常に高くなって、日本語になかなか訳することが出来ないという問題があるようです。大変惜しいことだと思います。お話はたいへん面白く、ありのフェルダ君の冒険を書いたものです。フェルダ君は虫ですから、生き物がいろいろ出てきて、虫の世界や生態をうまく描いております。先ほどの問題さえ解決できたら、日本にも紹介されてしかるべきではないかと考えます。この時期の創作童話、架空童話の特徴は、我々の暮らしているような日常の世界の中からでも、ファンタジーは探せるのだよ、というメッセージが根底にあります。近代的な小道具とは、テレビとかラジオとか車など、お伽噺には普通出てこないような小道具を持たせて、そこに非常に重要な役割を持たせている。そこに面白みも出てくるわけですけども、それが、チェコの創作童話の一つの典型です。

たとえば日本で非常に有名なチャペックの「郵便屋さんの話」(『長い長いお医者さんのお話』所収)があります。宛名のわからない封筒を郵便局の妖精、小人の助けを得て届けるという話です。主人公のコルババさんは日常社会の代表で、小人はファンタジーの代表で、そこに郵便制度ですとか、ダイムラーのような車がからんできて一種独特の楽しい世界を作り出している。この作品などはチェコの創作童話の特色が現れている作品です。それほど古い話でなくとも、最近書かれたスヴェラークという人の作品で、この人は脚本家兼俳優なのですが、多才な人で、子どものための本も書いています。その一つとして「お

父さん、あの話はいいわね」という話があるのですが、小さい子どもを寝かせるための話をどうやって作り出していかを、父親が四苦八苦しながらマスターしていくという話です。初めは子どもにも飽きられるのですが、身の回りにあるものを主人公にして、非常に面白い話をだんだん創り上げていくのです。たとえば、ハンガーを主人公にしたりして最後にはお母さんに「お父さん、今子どもたちにした話はよかったわね」と褒められるようになるという話です。これも、カレル・チャペックから続いているチェコの創作童話の伝統をうまく受け継いでいる話ではないかと思います。この本も千野先生を中心とする方々が訳されていると思います。そのように聞いております。これもまた、版權上の問題で刊行にまで至っていないということです。実は、このように隠れている原稿がたくさんあるのではないかと思います。なんとか掘り出したいものです。第一共和国時代の架空の話についてお話ししました。

第一共和国時代のリアリズム作品

それに続いて、この時代の現実の生活に即したリアリズム的な作品もたくさんあります。この分野の作品は翻訳されておられません。その一つの原因は、挿絵から入っていけない、テキストが主ということにあると思います。挿絵がぱっとしないとなかなか注目してもらえないというところがあります。しかし、テキストとしては非常に面白いと思います。その中で一つだけ訳されたものがあります。井出弘子さんが訳された『かじ屋横丁事件』（No.88 岩波書店 1974）です。これはプラハに住む貧しい少年が、インチキをしている商店、自分もそこで働いているのですが、その小さなお店の不正を暴いていく。ケチな商店の親父が貧しい人たちに対してインチキをしてつけ払いをして金を儲けているのです。それをだんだん暴いていく、探偵小説的な話です。これは 1930 年代に書かれた話ですが、エーリヒ・ケストナーの『エーミールと探偵たち』に触発されて書かれた作品です。『かじ屋横丁事件』の作者ジェザーチは、もう一つ探偵物を書いておられますが、それは訳されておられません。

『女ロビンソン』（No.84、85 邦訳なし）は、女性作家のマイエロヴァーが 1940 年に書いた作品です。女ロビンソンとは何かといいますと、『ロビンソン・クルーソー』とつながってはいますが、無人島に行くわけではありません。プラハにブラジェナという少女がいるのですが、その子に弟が生まれます。しかし弟が生まれると母親が死んでしまいます。一家は非常に困ります。お父さんはタクシー運転手をしているのですが、家の世話をする人がいない。そんな困難な時にブラジェナは学校を一時止めます。弟も施設に預けて、父親と一緒に大都会の荒波の中をたくましく生きていく自分の姿をロビンソン・クルーソーに重ねながら生きていく、という話なのです。最後は父親に良い伴侶が見つかり、弟も引き取って、自分も学校に復学するというハッピーエンドを迎えます。チェコの児童文学の中では非常に有名な作品です。ただ、これはマイエロヴァーという人が社会主義者であったということもありまして、最近では流行らないのですが、チェコの中で、非常に有名な

児童文学作品であることには変わりありません。

私はこの時代のリアリズム作品に非常に興味を持っているのですけれども、もう一つ申し上げますと、これも展示の中にあります、プレヴァの『小さなボベシュ』(No.83 邦訳なし)という作品があります。ボベシュという名前の小さな男の子なのですが、その男の子と一家の遍歴が書いてあります。ボベシュという少年はモラヴィア—チェコの東半分はモラヴィアといいます—の田舎で生活しています。父親は森の中で仕事をしていまして、小さな村でボベシュは育つのですが、非常に貧しいのです。村長の娘と仲良しになったり、かと思うと、村の中で非常に貧しい、しかも悪事に手を染めるような家庭の子どもと付き合っ、社会のいろいろな姿を見ていく。そのうちに父親が事故で森の中の生活が続けられなくなります。それで、一家は町へ引っ越して、父親は新しい仕事を見つけてそこで生活します。ボベシュは父親、母親、祖父母と一緒に暮らしているのです。ボベシュという男の子は可愛い存在として描かれていますが、おっちょこちょいといいますか、可愛いがゆえにちょっと無謀なことをしてしまって、それがもとで父親は仕事を失ったりします。だんだん一家は困窮していき、町の中でも最も貧しい人たちがいるところに住むことになります。ボベシュはそこで家庭内暴力を見たりします。ここからがだんだん大人の文学になっていくのですが、父親が社会主義に目覚めて、チェコの第二の都市であるブルノへ引っ越していくところで話が終わっています。この本は新しく刊行されてはおりません。それこそ図書館でしか見ることができませんし、この本について語るというのは、今どき流行らないことです。なぜ私が取り上げたかといいますと、ボベシュという少年が非常に愛らしく、その姿が大変うまく描かれているからです。訳もないのに「良いですよ、良いですよ」と言ってもお困りになると思うのですが。私は別に社会主義者ではないし、社会主義の悪い面をチェコのことを勉強をする中で学んできましたから、それを標榜するものではないことは、申し上げておきます。

ただ、今取り上げられない理由は、こういった事情もあります。つまり、先ほどの『女ロビンソン』にしても『小さなボベシュ』にしても、社会主義の傾向を持つということで、社会主義政権下でもてはやされ、すべての人が読むような課題図書になっていたのです。社会主義政権が崩壊して20年ぐらい経つのですが、社会主義に対するアレルギーはチェコの中では消えておりません。ただ、一つ言いたいのは、第一共和国時代に書かれて少し社会主義的なことが入っていて、社会主義政権下で課題図書として認められたということで、脇に退けてしまうのはどうかな、と思っております。チェコのほうでもおそらく再評価されてくるのでは、と思います。そういう事情があるということをお話したくて、以上のようなことを申し上げました。

第一共和国時代の歴史物語・冒険物語

第一共和国時代はいろいろな作品が書かれた時期でして、その残りのものをお話ししてから第二次大戦後のほうに入っていきたいと思えます。これまで架空の物語、創作童話と

いうジャンル、それからリアリズムというジャンルとについてお話ししましたが、歴史物語も書かれました。これは第一共和国時代の中でも終わりに近づいた頃が多かったのです。たとえば、オルブラフトという人の『古代の年代記から』(邦訳なし)という話です。先ほどイラーセクという歴史小説家の話をしました。トゥルンカの DVD もあるという話をしましたけれども、それと同じ頃の話を取っております。古代の話の再話ですね。オルブラフトという人は社会主義的な傾向を持った作家だったのですが、その人が昔のチェコの話を書いた作品です。

また、これは残念ながら展示の中にはないのですが、ヤロミール・ヨーンという人の『天上の島』(邦訳なし)という作品があります。『天上の島』の「天上」は一種のパラダイスですね。チェコの場合は海がありませんので、川に浮かぶ島で、具体的にいうと、プラハのヴルタヴァ川の中州である島が舞台です。国民劇場が 19 世紀後半に建てられました。先ほど申し上げました 19 世紀後半のチェコの歌劇などを上演するために建てられたものなのです。建てられるのに紆余曲折があり、チェコの国全土からの寄付によってこの建物が建てられた、という美談があります。その経緯を、プラハに住む一少年が、おじいさんになってから回想して孫に語る、という体裁で書いてあるものです。

そういった、チェコの歴史や文化にとって非常に重要な出来事を書いているわけです。それはなぜかという、ナチスの脅威が背景にあると思います。1930 年を過ぎた頃からヒトラーが台頭して、チェコのほうにも圧力をかけてきます。そして、1939 年にドイツに併合され、保護領になってしまいます。国家の危機が訪れた時に、チェコ人のアイデンティティをもう一度認識し、あるいは子どもたちに認識させる目的のもとに書かれたのが、オルブラフトの『古代の年代記から』であり、ヨーンの『天上の島』であったといえます。それから、これは独特でユニークなのですが、シュトルフという人がいまして、これは歴史物語なのですが、近い歴史ではなく、ずっと昔の先史時代を書いております。これは翻訳があります。『マンモスの狩人』(No.98 日高敏隆、島崎三郎訳 理論社 1977)で、チェコの東の方にいた一部族の少年、原始時代に生きた少年と、その一族の運命を書いたもので、面白い本です。

冒険物語も書かれました。チェコ人は非常にアウトドア好きですね。気軽に野外に行っ てキャンプをしたり、遠足をしたり、場合によって自転車で仲間と一緒に出かけに行って、野宿をしては次の場所に行ったりということもよくやります。そういうことから、冒険小説に対しても興味があるように思えます。チェコという国がヨーロッパの真ん中のこじんまりした国であるせいか、海外志向というものが非常にあると思います。そこが冒険物語に結びついてくるものと思うのです。この頃では南アメリカであるとか中東であるとか、そういったところを舞台にした作品、チェコ人が冒険していくわけですがけれども、たくさん書かれています。チェコでは、フランスのジュール・ヴェルヌの作品は非常に好まれています。古本屋に行ってもヴェルヌ専門の書棚があつたりして、いかにヴェルヌが好まれているかを認識しました。本だけではなくて日本にも紹介されていて DVD も発売されてい

るカレル・ゼマンというアニメーション作家も、ヴェルヌの小説を映画化しています。このほかにも動物を主人公にした物語とか、あるいは展示の中にもありますが、詩人ネズヴァルのナンセンス的な童話まで、いろんな作品があります。もろもろの作品の質が非常に高いということと、このように非常に多彩なジャンルにわたっていることが第一共和国の子どもの本の特徴といえます。ただ、第一共和国時代は1938年に終わります。歴史の教科書のようなことを言いますが、1938年にミュンヘン協定があって、ドイツに国境を接する地域がドイツに併合されてしまいます。その翌年にはドイツの保護領となって、1945年連合軍によって解放されるまで占領されます。連合軍といっても、その中心はソ連軍だったのですが、彼らによってドイツ軍から解放されるまでこの状態が続きます。

第二次世界大戦後の子どもの本

1945年に終戦となって、戦後3年間は社会主義の政権が立つ前の体制でした。このときにでたのが戦争をテーマにした作品です。戦争が新しい記憶として残っていたからでしょう。その作品の内容は深刻なのですが、テキスト的にはスリルがあって面白いものがあります。面白いと言ったら、大変な目に遭っている登場人物たちに申し訳ないかもしれませんが、ともかく読ませるものが多かったと思います。その中でひとつ翻訳があるものは『レニとよばれたわたし』(No.106 らくだ出版 1982)という本ですが、井出弘子さんの訳で出ております。これは、非常に簡単に筋を申し上げますと、チェコ人の女の子が、物心つく前にドイツ人にさらわれてしまうのです。何も知らされないで、ドイツ人の家庭でレニという名前で育てられていきます。この家庭で暮らしていくうちに違和感を覚えていきます。自分が母親とか兄に愛されていないことを感じ、秘密のトランクの中に自分の知らない土地のものが詰まっています。仲良しの先生と一緒に探っていた結果、自分が戦争中にさらわれて育てられたチェコ人であることを知ります。そして担任の先生の協力を得て、チェコ人であることを突きとめて、チェコにいるお母さんのところに帰っていくという物語です。これだけが戦争をテーマにした作品の中で訳されているものです。

1948年に社会主義政権が樹立されました。1950年代の初めというのは、チェコの全般的な歴史の中では非常に暗い時代とされています。スターリニズムで粛清などされた暗い時代です。ただ、児童文学に関していいますと、1950年代からだんだん整備がされてきました。子どもの本専門の国立児童図書出版所という出版社ができ、その指導の下、「黄金の5月」という、先ほど申したスラーデクという詩人の詩からタイトルをとった児童書専門の雑誌が創刊され、環境が整備されてきます。この時代以降は日本にも紹介される本が増えています。それは部分的にはすぐれた挿絵画家の活躍のたまものであると思います。例を挙げますと、トゥルンカであり、ズマトリーコヴァー、ミレル、ボルン、パレチェック、ヤネチェック、と名前を挙げたら限りがありませんが、これらの人々のすばらしい挿絵によるものが多いです。

作家のことからいいますと、この時期、児童文学界を引っ張っていった3人の作家がお

ります。そのひとり、ボフミル・ジーハ、それからエドアルド・ペチシカ、フランチシエク・フルビーン。これらの人々はパネルでも紹介されていますのであとでご覧ください。

ジーハという人は多くの著作を残しております。先ほどお話ししました、国立児童図書出版所の所長も務めておりました。社会主義政権下の児童文学界を文字通り引っ張っていった人物です。国際アンデルセン賞作家賞を受けています。作品そのものに対する評価もあったと思いますが、国立児童図書出版所において児童書振興のために尽くした努力というものが評価されていたと思います。

ペチシカも子どものための作品だけでなく多くの作品を残した人です。「クルテク」(もぐらくん)の初期のテキストを書いた人です。あくまで、もぐらくんはミレルが作り出したキャラクターであるのですが、そのキャラクターにいろいろな作家がテキストをつけております。一番初めにつけたのがペチシカでした。ペチシカはそれだけではなく、古代神話の再話もたくさんした人で、ここにお見せするのは、『古代ギリシャ神話』(邦訳なし)の再話です。この再話は非常に質の高い文章でできております。古代ギリシャ神話などは直接、原典から物語を再話すればよいと思うのですが、ペチシカの書いたものをフランス語に訳して出版している例もあるくらいです。ペチシカのなかでも売れ続けているものですが、どれだけ質が高いかかわかると思います。これだけではなく、ペチシカはメソポタミアの物語であるとか、チェコの町や城、歴史的な事件取材した子ども向けの物語もたくさん書いています。

そして、詩の分野では、19世紀の後半に一時期盛んになってから、第一共和国時代はそれほど書かれなかったのです。第二次世界大戦後は盛んになってきました。その代表的な人がフルビーンという詩人です。詩というものを翻訳するのはなかなか難しいと思いますが、フルビーン日本語訳はいくつかあります。木村有子さんの訳されたものもありますし、千野先生の『花むすめのうた』(No.108 ほるぷ出版 1984)はトゥルンカの絵が可愛いですね。フルビーンという作家は第一共和国時代に下火になっていたものを再興させた詩人といえると思います。彼を皮切りに様々な詩人が詩を書いていくこととなります。

“ブラハの春” —その後

第二次世界大戦が終わってからの子どもの本は多種多様でして、体系づけるのはなかなか難しいのですが、大雑把に話してみたいと思います。

1968年に“ブラハの春”改革が始まりますが、8月21日にワルシャワ条約機構軍が侵攻してきて、その改革運動が潰されるという事件が起こりました。チェコ文学一般について語る際には見過ごせない重要な事件でして、この事件がきっかけになって、チェコ人の作家では非常に知られている、ミラン・クンデラとか、ヨゼフ・シュクヴォレツキーという作家たちが、海外に亡命しなければならなくなった、非常に大きな事件でした。

チェコ文学一般を語る際には見過ごせない事件なのですが、児童文学界には表面的には大きな影響は与えなかったといえます。でも、この事件の前と後とでは、現実の生活に即

したリアリズム的な作品にしても、架空のお伽噺という創作童話にしても、作品に明らかに違う傾向が見られると思います。それは、リアリズム的な作品から言いますと、1950年代半ば以後は、社会主義時代当初の混乱が収まり、子どもたちのありのままを描写するという傾向があって、その代表がジーハの『ホンジークのたび』(No.124 井出弘子等訳 童心社 1970) という作品に表れています。

しかし、これが1960年代になると、だんだんそういう枠から抜け出していくといいますが、どちらかというと、社会から少しはみだしたような人々を主人公にしています。たとえば、ジーハの『野生馬リン』(邦訳なし)という作品で、ここでは主人公がリンという馬を飼っているのですが、この主人公は、村の共同体の外で生きている老人です。それから、これは翻訳がありますが、『ぼくらは船長』(No.131 栗栖継訳 岩波書店 1965)は、社会主義の少年団であるピオニールを扱っています。ピオニールというのは赤いネクタイを着けて活動する団体ですが、社会主義の優等生の子どもが入っていくのです。そこから脱退した少年を主人公にしています。

展示の中では書き手の一人として紹介されているオタ・ホフマンという作家がありますが、その作家が書いた『逃亡』(邦訳なし)という作品の主人公は優等生ではありません。主人公の少年は放火犯の疑いをかけられて、途中で逃げ出してしまいます。本当の犯人である不良少年に監禁され連れ回され、息が詰まりそうな逃亡生活について書いてある本です。最後は主人公の少年が体の具合を悪くして、それを見た不良少年が連れ回すのをやめて、病院まで連れていきます。当然自分が逮捕されるのを覚悟して出頭します。実際はつかまりはしないところで終わるのですが、社会の優等生ではないアウトサイダーの主人公を描いた作品が出てきたのはこの1960年代です。これは“プラハの春”の統制が緩やかになってきた時代背景とやはり無関係ではないと思います。

ところが、1968年以降になりますと、またありふれた優等生的な子どもを主人公にした話が多くなってきます。それは井出弘子さんが訳されているビーテクという少年を主人公とした『ビーテクのひとりたび』(童心社 1980)とか『ビーテクとなかまたち』(童心社 1981)などがありますが、そこに描かれているのはありふれた子どもなのです。『ビーテクのひとりたび』というのはジーハの初期の作である『ホンジークのたび』と同じように一ホンジークの場合は都会から田舎に行く、ビーテクの場合は田舎から都会に行くのですが一自分の住んでいるところとは違うところへ行って、そこに違った生活があるのを知っていく、という傾向の本が書かれるようになります。1950年代から60年代にかけて一般的によく取り上げられるテーマだったと思います。展示の中にもあるリスカという、今日ではあまり読まれることのない人ですが、『楽園のマルチン』(No.150 邦訳なし)も都会から田舎に移り住んで、そこでの環境に馴染んでいく少年を主人公にしています。これは現実生活に即した物語なのです。

一方、架空の話ではどうかといいますが、60年代にはナンセンス的な要素のつまった作品が多くなってきました。その代表的な書き手が、ホフマンであり、愉快な作家であるマ

ツォウレクという人たちです。それが 1968 年を過ぎるとナンセンス的なものは少なくなってしまう。どういう話が多くなるかという、昔話的というのでしょうか、森などを舞台にして展開される物語、代表的なものとしてチトゥヴルテックの『ルムツァイス』(No.180~182 邦訳なし)というシリーズがあるのですが、そのような、どちらかというと、あたりさわりのない話だと思います。一時期ナンセンスという要素が後退する時期がありました。1968 年が過ぎた 70 年代、社会主義の観点から見た正常化の時代に書かれた作品の傾向です。

70 年代後半から 80 年代にかけては、だんだん正常化の締め付けが薄れてきたのでしょうか、現実の観点に即した物語でいいますと、複雑な家庭環境まではテーマに取り上げられなかったのが、だんだん取り上げられるようになった。当たり前なことなのですが、それが 1970 年代から 1980 年代ではないかと思います。

チェコは離婚が比較的が多い国です。シングルマザーもいますし、それがゆえに子どもが受ける受難もあったのです。そういった複雑な環境をそのまま描写した作品は、この頃からだんだん出るようになってきました。その書き手として、どちらかというと女性の作家が書いているということがあります。展示でも一つ章を設けて女性作家を紹介しています。

それから、学校を舞台としたユーモラスな物語もだんだん出てきました。これは展示の一つである『おせっかいシーサ』(No.156 邦訳なし)ですが、ユーモラスな作品で、アドルフ・ボルンの挿絵がついた、ボジークという少年を主人公とした作品もたくさん刊行されています。一方、アドルフ・ボルンの挿絵で出たマツォウレクという作家は、1960 年代にナンセンスの書き手として登場しました。(スクリーンを指して)これはマツォウレクの作品で、*Mach a Šebestová*(マフとシュベストヴァー)といいまして、日本語訳では『ふしぎなでんわ』(No.161 榊直子訳 佑学社 1987)という題名がついています。男の子のマフが持っているのが電話ですね。紐がちぎれている電話ですが、これに向かってお願いすると、何でもかなえてくれる打ち出の小槌みたいなものなのです。幼なじみの二人のマフとシュベストヴァーが、いろいろな冒険をして、愉快的物語を展開します。ビデオもありまして、日本に紹介できればと思っているのですが。非常に面白い作品です。

ビデオと言いましたけれど、チェコのゴールデンタイムに放送される、「ヴェチェルニーチェック」(小さな夕刊紙)という短い番組があります。そのころはチェコスロヴァキアテレビですけれども、午後 7 時前後に放送される 10 分に満たないようなアニメーション番組で、人形劇のときもあります。このマツォウレクのほかにも、冒険活劇のルムツァイスとか、展示にある『飛ぶ帽子の中のボブとボベック』(No.185 邦訳なし)、それから往年の名作、カレル・チャペック、ラダなどがアニメーションになって出てきています。チェコの子どもたちに、児童文学の名作をたくさん紹介し、非常に大きな役割を果たしたといえる番組です。

資本主義社会となって

ビロード革命が1989年に起きます。ここで、社会主義政権が終わりまして、チェコは西側と同じ資本主義社会に移行していくわけです。こういうことは全体的にチェコにとってプラスになるわけです。そのおかげで、今はEUにも加盟しまして、どんどん経済発展をしている最中です。ただ、どんなことでもプラスの面もあるけれどもマイナスの面もあるわけで、資本主義社会になってくると、表現の自由とともに、どんなものも世に出ることが許されるようになってくるわけです。その結果、低俗な書物もたくさん出てきます。日本でも溢れていますけれども、質の悪い扇動的な読み物が出てきています。児童文学者と出版社をめぐる環境も激変してしまっていて、ひとことで言いますと環境は厳しくなっています。新しい書き手もなかなか現れていないような状態です。その一方で児童文学の世界を牽引していったのは革命以前に名を成していた作家たちで、その後も地道に活躍しております。それと同時に昔の名作も復刊され、再版されています。

児童書に対する賞などを設けるなどして、児童文学を振興しようとする動きは地味ながら続けられています。これからどのようになるか、今の時点では余裕がないかもしれませんが、どんどん豊かになってきておりますので、今後展開が注目されるどころです。先ほど新しい書き手がなかなか現れないと言いましたけれども、最近、若い作家の中にも子どものために作品を書くという傾向がみられてきておりますので、これからの展開が非常に注目されるころだと思います。

チェコ語という言語はとっつきにくい言語だと先ほど申し上げました。その事実には変わりないのですが、チェコ語のできる日本人も増えています。チェコの文化を広める使命を持ったチェコセンターもオープンしましたし、チェコの持つ宝、映画も文学もアニメーションもすべて、紹介される機会は増えてくると思います。児童文学もその中に含まれるであろうと希望します。ということで、今日の話が終わらせていただきたいと思えます。

質疑応答

Q: 私はヨゼフ・ラダの作品が大好きなのですが、ラダの作品には故郷のフルシツェ村を書いた作品が多いのかなという印象がありまして、そういった郷土愛であったりとか、土地の匂いのような作品を残しているチェコの作家は他にいますか。

A: たとえば、代表的な作家、カレル・チャペックの童話など直接、地名がでてくるのがありますね。盗賊の話の中にでてきたり、彼の作品の中では北東チェコの風土は切っても切り離せないものだと思います。といいますとポラーチェクの幼い頃の思い出を書いた『ぼくらはわんぱく5人組』(No.93)なんかもリフノフ・ナト・クニェジュノウを舞台にして書かれています。

Q：チェコで日本の児童書が翻訳されているものがあるのでしょうか。

A：それは、国際子ども図書館のスタッフの方によく調べていただきまして、展示の中（注：特別コーナー：チェコにおける日本受容（説話・児童文学））にもあります。私が覚えているものはいぬいとみこさんの『ながいながいペンギンのはなし』とか、立原えりかさんの作品が訳されています。

Q：チェコの今の子どもたちの様子や、学校とか図書館の様子を教えてください。

A：それについては、最近、私はチェコに行っていないので、あまり詳しくはありません。そして、そのことについては予定として7月にチェコの専門家をお呼びすることになっています。チェコにはブルノの大学に、児童文学の学部といますか、研究所があります。そちらの所長さんをお呼びすることになっています。その先生は日本の子どもたちがどんな本を読んでいるのか、来日の際に見たいということで私がオーガナイズして見せたいと思っています。その際に、お聞きしたらいい話が聞けるのではないかと思います。もしかしたらそのことをテーマに話していただけるかもしれません。

Q：展示会場にカッパの展示があったのですが、チェコでは他に日本でいう妖怪、想像上の動物がいるのでしょうか。

A：たくさんいます。たとえば、カレル・チャペックの『長い長いお医者さんの話』にも出てきて、中野好夫さんの訳では「ヤカマシ小僧」と呼んでいますが、ヘイカルといいます。チャペックは愛すべき存在として描いていますが、民間伝承では恐ろしい存在として描かれています。ヘイカルという森の中の騒霊とか、水の中のボドニークというカッパとか、今思いつかないのですが、たくさんあります。それについてはチェコの伝説についてまとめてみたいと思っていますので、注意していただければと思います。